

たじみん昼話 91

その平均は真のもの？

多治高では、テスト返却時に毎回同じ現象が発生する。クラス平均点を訊く→点数を知る→平均点より1点多いか少ないかを基準に爆発的に生徒が一喜一憂する→反応が落ち着く→桔梗が、「クラスの平均点より上か下かで満足や悲観をするなかれ、真の相手は全国の受験生だ。」と語る、という現象だ。

平均点や偏差値に適度に反応するのは良い。しかしその数値の結果を見て、この世の終わりとばかりに落ち込んだり、ましてや第1回(3年次)の模擬試験結果で、第一志望校を諦めるというのは明らかに過剰反応だ。

そもそも平均値は母集団により大きく変化する。当然自分の得点の立ち位置を示す偏差値も、母集団次第でその持つ意味も変わるのだ。

天気予報で使う平年並という数値も平均値の一種だ。この単語には、地球生命誕生から今日までの38億年間の平均気温のイメージがある。しかしこの数値は過去30年の平均値に過ぎない。即ち、38億年に対して極めて短時間の母集団データであり、真の地球の平均値ではないのだ。何億年というスケールで上下を繰り返す地球の気温からしたら、たかが30年の平均値で今が暖かいときなのか低いときなのかは結論づけられないが、我々はこれを使用している。少し話がそれたので地球のスケールから時を戻そう、ではなく話を戻そう。

そもそも3年生で受ける模試や受験の母集団の2割は、高校の学習課程履修済みの浪人生だ。当然平均点は2年生の時より押し上げられるので、相対的(偏差値)に現役生の成績が落ちるのは当然なのだ。始めから不利な状況なのだから、3年の第1回目の模擬試験の結果で、終わったと思い、志望校を変更するのはあきらかに早すぎる判断なのだ。

桔梗の指導経験では、現役生の履修が完成する11月から12月以降に受ける模擬試験の偏差値が実力を示していると考えられる。この時期から2月にかけて現役生の実力は二次曲線的に伸びる。つまり浪人生の有利も、せいぜい夏休み過ぎまでで、それ以降は現役が圧倒することを覚えていて欲しい。

残念なのは、多治高では真の成績が判定される前に、焦りから志望校を変更する生徒がいることだ。焦る気持ちは分かるが、前述した真の偏差値の存在に気がついて欲しい。国立の後期試験は10倍を超える凄い倍率になることが多い。しかし受験生の大半が受験を完了したり諦めるため、実際に受験する人が

大幅に減少して、中には1.5倍まで低下する例もあるのだ。焦る前にそれを思い出して粘り強く受験に挑んで欲しい。

ちなみに、多治高の教育方針4にはこう記してある。

「・・・・最後までやり抜く姿勢を保つ生徒・・・・」

実力が伸びてきていることを自覚せずに、諦める事だけは避けて欲しい高校では自ら考えなければ学んだことにはならない。。